

大人が絵本を 第12回 待合室での



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

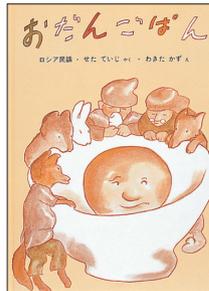
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事フアウンダー

🐧 歯科医院に響きわたる歌声!?

「♪ぼくは天下のおだんごぼん。粉とクリーム
たっぷり混ぜて、ほかほか焼けたら窓から転がり、
おじいさんおばあさんから逃げたのさ♪」

『おだんごぼん』
瀬田貞二 訳
脇田和 絵
(福音館書店)



ロシアの民話『おだんごぼん』の歌声が響きわたっているのは、とある平日、10時30分の小児歯科医院内です。もちろん診療日ですので、診療室では診療が行われ、待合室は患者様親子でゴった返しています。

私たちの「院内おはなし会」では、読み手がマスコットを使った歌を歌い始めると、診療台に寝ている子どもたちもむくっと顔をこちらに向けてきます。しかし、読み手がしっかりとお話を伝える相手は、目の前で参加してくれている子どもたちで、一冊目の『くだものさん』を読み始めると、擬音語・擬態語豊富なかわいい仕掛け絵本に1歳から3歳くらいの子供たちは、お母様と目を合わせ、絵本を指差しながらニコニコニコします。その子どもたちの後ろ向こうの診療台では、身体を起こして絵本が見える体勢になるお子様も現れます。

そうするうちに、診療台では診療を受けているお子様と歯科医師・歯科衛生士との間にも物語の展開

や登場人物について会話が生まれていて、院内がおはなし会の空間となっています。それは、日常の歯科医院の空気とは明らかに異なる時間帯です。

🐧 小児歯科医院のおはなし会

「おはなし会」とは、一定の時間を設けてストーリーテリング^{*1}や絵本の読み語りを行う、図書館の児童サービスの中で中心的な位置を占める活動です^{*2}。児童図書館や学校図書館で行われているもので、絵本と図鑑の親子ライブラリーでも対象年齢を4領域に分けて「ビブリオえほんのおはなし会」を毎週末開催しています。

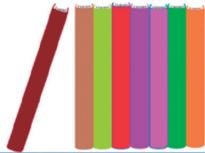
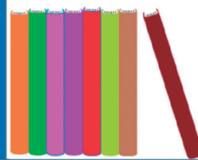
この「おはなし会」を小児歯科医院内でも開催しているのですが、図書館で行うものと目的は異なり、歯科医院という極めて敬遠されがちな空間における心理療法的効果をねらったもので、司書と受付保育士の2名で実施しています。院内おはなし会に初めて参加するお子様の中には、歯科医院に入るという行為だけで大泣きする子が時々います。そんなときは、他の参加者に気兼ねしないで泣いているまま参加してよいこと、あるいは少し後方から聴いてもよいことをお母様へ伝えます。このどちらの選択をしても、お話の読み手に注目し集中してもらうための、始まりの手遊び歌が始まると、泣きながらも必ず、手遊びに注目します。切替の早いお子様は自ら真似して手遊びを始めます。警戒心の強いお子様でも、一冊目、二冊目と進めるにつれ、どんどんお話の世界に入り込み、ユーモア絵本などを

*1 語り手が物語を覚えて、本を使わずに聴き手に語ること⁶⁾。

*2 漢字表記の「お話し会」とは、子どもを対象にストーリーテリングを聴かせる集いのこと⁶⁾。

手にするときは！

「絵本のおはなし会」



企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



読むとお母様に感想を伝えながら笑っています。そして、どんなに泣いていたお子様でも全員が全員、笑顔で帰っていくのです。実際、「最初は大泣きで、参加できないかもしれないと思いましたが、子どもがお話に引き込まれていく様子が見られて、とても嬉しかったです」という記述感想を何度もお母様よりいただいています。



お話の世界に入り込むパワーは何？

歯科医院の待合室で、しかも診療器具の音や泣き声が響く同じ空間でおはなし会を行うなど、図書館関係者から邪道だと指摘を受けますが、多分にもれず私の考え方も以前はそうでした。図書館で行うおはなし会は、周囲の物音や人の気配に妨げられずに子どもと語り手が落ち着いて楽しむことができるような、おはなし会の部屋や空間が必要とされています¹⁾。途中参加ができない図書館も多くあります。

それが、診療中の歯科医院の真ん中で行うのですから、物音をシャットアウトどころではなく、泣き声や機械音に紛れて子どもたちは集中なんてできないのではないかと思われる方も多いでしょう。ところが、多くの子どもたちは一度、お話の世界に入り込むと、機械の音や泣き声がしようと、お話の世界に入り込んだままなのです。他の子どもの泣き声など耳に入っていないようで、まるで歯科医院とは別空間にいるかのような、診療室とも待合室ともバリアが張られているかのような顔つきなのです。読み手は声を張らないといけないという体力勝負のおはなし会ではありますが、この子どもたちの集中力の高さには驚かされています。これが、故・瀬田貞二氏が言っている本当の絵本の持つ力、物語の力²⁾な



院内おはなし会

のでしょうか。

良い事例を先に紹介しましたが、もちろん集中できないお子様もいます。1~3歳クラスと3~5歳クラスの2回開催のうち、低年齢のクラスでは絵本よりも待合室にあるおもちゃへ移動してしまうお子様がみられます。図書館におけるおはなし会の空間の型について、書棚がある共用型に比べて専用型(個室)では話に集中している乳幼児が多いという報告があります³⁾。医院では「気が散る」ものばかりですが、お話の世界に入り込む子どもたちは、どんな環境であっても集中することができるのも事実です。

医院でのおはなし会を始めるまでは、このような環境下で、どのように対処すればよいのか、そもそも成り立つのかなど、不安や戸惑いばかりでしたが、いざ始めてみると親子で本当に楽しそうにしている姿を拝見できたり、絵本に向かって体当たりで話しかけてくるお子様がいたり、反応が伝わってくるのです。このような子どもの持つ能力をneoteny (ネオテニー、本稿最終章で説明) と考えることができます。



診療中の子どもたちとおはなし会

待合室でおはなし会を行っている間も、歯科医師、歯科衛生士、受付保育士はいつもと変わらず通常の診療に当たっているのですが、待合室から楽しそうな声が聞こえると診療室まで明るくなって活気づくようです。デンタルスタッフが感じている診療中のお子様への心理的な影響をいくつか紹介します。

[ケース1] Aくん 2歳

治療が嫌ながらも頑張っていたAくんが、待合室から聞こえてくるお話に興味を持ち、話を聞きながら最後まで頑張れ、次のフッ素を咬んでいるときはお話に集中してとても楽しそうにしていた。お母様も喜んでいました。

Aくんにとって、「嫌な」治療を頑張っていた中で聞こえてきたお話により、ドキドキしていた気持ちが和らぎ、落ち着きを取り戻せたのではないかと思います。

[ケース2] Sちゃん 3歳

おはなし会は見えなかったが、楽しそうな声が聞こえてきたので、治療中のSちゃんの気がそれて泣き声が止まっていた。

「ここ(チェアサイド)でも絵本を読んでほしい」とDHにリクエストされた。

「楽しそうな声」が聞こえてきたことで、不安な気持ちや緊張感から気が逸れて、また、自分に対して読んでもらうことで楽しさを分かち合いたいと思ったと考えられます。

[ケース3] Aちゃん 3歳

いつもは治療の最初から泣いているAちゃん。その日はおはなし会に参加していたAちゃんの、会が終わってからの呼び入れがスムーズにできた。治療中は泣いてしまったが、治療の始まりは泣くことなく、とてもいい感じに入れた。

絵本に集中していた間、不安感や緊張感から気持ち

ちが逸らされ、そのまま落ち着いた状態で治療に入ることができた事例です。

[ケース4] Kくん 4歳

「ぐりとぐら」のリトミックシアターは診療室全体に楽しそうな歌が聞こえていて、治療中のKくんも想像しながら楽しんでいました。誰もが知っている絵本なので、Kくんと会話を広げることができた。

楽しそうなリズム歌が聞こえてきたことで、Kくんはポジティブな気持ちを得られたのではないのでしょうか。また、おはなし会では、読み手と聴き手の間に言語的、非言語的やりとりが生じますが、おはなし会エリアではなくユニットで小児と歯科衛生士のコミュニケーションの促進が図れたようです。

「ぐりとぐら」
なかがわりえこ 作
おおむらゆりこ 絵
(福音館書店)



診療中のお子様は、自分が参加できていないおはなし会が気になり、耳をそばだてて話を聞くことで緊張がほぐれ、結果、診療・処置もスムーズに行えているようです。特に、フッ素塗布のお子様にと顕著な効果が出ているようで、フッ素中の時間をおはなし会に参加できる態勢に歯科衛生士が導くことで、今まで苦痛だった数分が楽しい時間に変わったり、泣かずに終われたりとお子様にとっても、歯科衛生士にとっても良い影響をもたらしているようです。



Neoteny(ネオテニー)に注目!
大人に必要とされる「子どもの要素」

診療中の気晴らしやリフレッシュは、歯科医、歯科衛生士との会話でも得られるでしょう。子どもたちが抱く治療の恐怖や不安を取り除くには、子ども

時代の旺盛な好奇心をかき立てて、自分の見えないところ、あるいは自分は参加していないけれど垣間見える楽しそうな光景に、「何があるの?」「何だか楽しそう!」「加わりたい!」「聞きたい!」と考え、そして行動に移します。このような一連の子どもの思考回路や行動について児童発達心理学者のアリソン・ゴブニックは、NHK Eテレ・TEDでスーパープレゼンテーションを行っています。

「大人でも、頭が柔らかくて想像力が豊かで新しい事のできる蝶になりたいなら、ときどきは子どものような考え方をすべきかもしれない⁴⁾と赤ちゃんの考え方を分析しています。番組ナビゲーターの伊藤穰一氏の解説を紹介します。「赤ちゃんには、あまりいろいろなことを考えていないイメージもあるかと思いますが、実はとてもしっかり考えていたりします。私が英語で一番好きな言葉は『neoteny』です。『子どもの要素を持ったまま大人になる』という意味です。希望とか、好奇心とか、イマジネーションとか、遊び—そういった要素こそが、子どもの要素だと考えています。』⁴⁾

院内おはなし会の子どものたちの行動から感じることは、ブックスタートなどの絵本と子どもや大人の関わりは、この「Neoteny」との関連性と考えることにより、「絵本と医療」を結び付けることができると考えています。「Neoteny」の考え方を「絵本と医療」に導入することにより、新しい小児歯科医療の方向性も見えてくるのではないのでしょうか。この連載の「大人が絵本を手にするときは!」と「ネオテニー」を重ね合わせてみてください。

また、アリソン・ゴブニックは著書『0歳児の「能力」はここまで伸びる』のなかで、次のように記述しています。「赤ちゃんは文字どおり生まれた時から、言葉について重要なことをいくつか知っていますし、最初の言葉をしゃべる前に、言葉についてたくさんを学習しているのです。まず初期の段

階で学習することに、言葉の音声システムがあります。おしゃべりができるようになる以前に、私たちは音の暗号が解説できるようになり、コンピュータもお手上げの数々の問題をすでに解決しているのです。』⁵⁾

このように、「絵本と医療」や「ブックスタート」について語る上で重要な視点を私たちに示してくれているのです。



今月もお付き合いいただき、ありがとうございました。

文献

- 1) 金沢みどり: 児童サービス論(ライブラリー図書館情報学7巻), 学文社, 東京, 2012, pp.132-142
- 2) 瀬田貞二: 絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集, 福音館書店, 東京, 1985, pp.93-207
- 3) 北岡敏郎, 竹本有里: 地域公共図書館の児童書エリアに関する研究(1)おはなし会とその空間について, 日本建築学会九州支部研究報告, (53), pp.105-108, 2014
- 4) アリソン・ゴブニック: What do babies think? 「赤ちゃんは何を考えているの?」, NHK Eテレ スーパープレゼンテーション, 日本放送協会, 2015.7.15 EテレNHKオンライン <http://www.nhk.or.jp/superpresentation/backnumber/150715.html>
- 5) アリソン・ゴブニック, ほか 著, 峯浦厚子 訳: 0歳児の「能力」はここまで伸びる, PHP研究所, 東京, 2003, pp.169-170
- 6) 日本図書館学会: 図書館情報学用語集, 丸善, 東京, 1997, pp.17

絵本

- 1) 瀬田貞二 訳, 脇田和 絵: おだんごばん, 福音館書店, 東京, 1966
- 2) tupera tupera: くだものさん, 学研教育出版, 東京, 2010
- 3) なかがわりえこ 作, おおむらゆりこ 絵: ぐりとぐら, 福音館書店, 東京, 1963

